

【第17回年次大会 基調講演 要旨】

「女性美」を拓く後宮

藤本宗利

「清少納言」という個性を、どう思われるであろう。

そのことに関して、小学館の新編日本古典文学全集『枕草子』の月報の中で、作家の田辺聖子氏は興味深い指摘をしている。氏が小説『むかし・あけぼの』を執筆していた70年代半ばのころ、世間に広く流通していたのは、圧倒的に清少納言嫌悪の論であり、中には氏が首をかしげたくなる程に、ヒステリックな論調のものもあったというのである。

そういう冷評の一典型として、藤岡作太郎氏の『国文学全史 平安朝篇』（平凡社・昭和49年所収）「枕草紙」の論に注目してみよう。「多くの記事は自讃に充ちて、清少納言が驕慢の性を表わせり。その自讃は概ね己が学識に関し、その艶容麗色に誇るが如きことは、殆ど見るべからず。——中略——藤原斉信、同行成は才貌抜群の殿上人、またただなる中にもあらねど、かれらが少納言を愛するは、その学識をめずるものにして、その容貌を愛するにあらず」。要するに、清少納言は醜女であったがために、才学を誇るしかなかったというのである。

斉信、行成といった若きエリートや、美貌の才人として知られる主家の御曹司の伊周などから、「顔を見せろ」の「深い仲になろう」と言い寄られ、「私なんかオバサンで、ルックスにも髪にも自信無いのに……」と困惑していると描いて見せる筆が、本当に自分の醜貌を恥じた結果だなどとは、私にはとても思えぬのだが、それはここでは措くとして、「醜女であったから学識を自讃する」という論理には注意したい。そこには「艶容麗色」、すなわち一般に女性的魅力とされる属性に、対峙するものとしての「学識」という捉え方が露わに見て取れるからである。

しかしながら藤岡氏自身が指摘するように、「艶容麗色」を有さぬとされる清少納言が、その才学ゆえに殿上人らに愛されたというのなら、彼らにとって「学識」は「艶容麗色」とは異種の、しかしながら確かな女性的魅力の一つと映ったはずであろう。

そもそも清少納言の「学識」の表出は、実際にどのようになされていたのであろうか。例として、ここでは二つの章段を取り上げてみたい。一つは殿上人から、花の散った梅の枝を送られて試問された時、漢詩句の引用によって返答する「殿上より」の段。もう一つは簾の下から押し込まれた竹に、漢文の故事をふまえて「此の君」と応じた「五月ばかり、月もなう」の段。いずれも少納言の漢詩文引用に対し、殿上人はその元の詩を朗詠して、賞讃の意を表し、その讃辞は帝の耳にも届いて御感にあずかるという点で共通している。

ところで注目には値するのは、この両段における殿上人側からのアプローチが、もともとは相手の和歌的返答を予想してなされたものであったという点である。なぜなら同時代にあって、男性官僚にとって必須の教養であった漢詩文の知識は、女性にとっては無用のものという考え方が一般的だったからである。女性にとって大切なのは、和歌の知識・才能であり、漢学の才は不幸のもと、という発想すらあった（『紫式部日記』・『大鏡』）。

つまり両段における殿上人側の働きかけには、当時の通念的な教養意識が底流していた。清少納言の応答は、そういう通念を覆すものであり、その当意即妙の手並みが、男性たちからの賞讃を浴びたということになる。換言すれば漢詩文引用は、通念的な女性美の枠を逸脱する、新奇なる魅力として提示されたわけであって、それが宮廷貴紳たちの好評を博したことについては、「殿上より」段における一条天皇の、「よろしき歌など詠みて出だしたらむよりは、かかる事はまさり

たりかし」の如き評価を見ても明瞭であろう。名歌ならいざ知らず、「よろしき歌」程度のものならば、漢詩句引用による応酬の方がまさるといふ主張。つまり臨機応変な漢文引用は、一条朝という時代の好尚を色濃く反映したものだということが見えてくるのである。

このように見えてくると、藤岡氏の論に代表されるように、清少納言の漢才の披瀝を、ひとえに彼女の「驕慢の性」に結び付ける考え方が、いかに妥当性を欠くものであるかということが明らかとなろう。

清少納言はあくまでも中宮定子に仕える女房として、殿上人たちからの風雅な挑戦に応じたわけであり、その挑み合いに臨むべく彼女の選んだ「武器」が、漢詩文の知識であったということなのである。しかも漢才は、実のところ定子自身にとっても得意とする武器であったことには、注意したい。『栄花物語』や『大鏡』がこぞって強調するように、定子の家系——中関白家と通称される一門は、母の高階貴子が「高内侍」という名で宮仕えしていたという特異な経歴の持ち主。しかも女性ながら本格的な漢才の持ち主として知られている。この母親の薫陶により、一門は漢才とモダンな陽気さで、宮中の人気を博したのである。

(ふじもと むねとし・群馬大学教授)